

令和5年度大学図書館職員長期研修講義
「大学と大学図書館」

令和5年7月3日（於 筑波大学）

東北大学副学長（広報・ダイバーシティ担当）
附属図書館長
大学院医学系研究科 教授
大隅 典子

東北大学附属図書館長としての任期が残り1年となる今年度も、大学図書館職員長期研修講義にてお話しさせていただくことを嬉しく思っています。講義要綱の準備をしながら1年を振り返っていますが、なんと目まぐるしいことか……。

1. 論文のオープンアクセス化の現状と今後

昨年ご紹介した「転換契約」ですが、初年度のWiley社との契約は、当初4つの大学で開始されましたが、現在では18の大学図書館に広がっています¹。また、2023年にはさらにSpringer Nature社のSpringer分について、10大学との間に「転換契約」が結ばれました²。現在、Elsevier社との間での交渉を行っているところと聞いています。この問題がメディアや研究者の間でも取り上げられるようになったことは何よりと考えます。

すでに種々の媒体においてこの「転換契約」について説明してきましたが（例えば「科学」の記事³）、再度おさらいをしておきましょう。まず大前提として、この30年の間のデジタル化とインターネット化により、知のインフラ整備の在り方が大きく変わりました。世界では膨大なデータをどのようにアーカイブし、オープンに活用できるようにするのか、という点についての議論が中心となっており、やがて「論文」という形態も無くなるかもしれないとまで言われています。したがって、電子ジャーナルの購読（Read）とオープンアクセス（OA）論文出版（Publish）を合わせて契約する「転換契約」は、あくまで“一過性”の対応であろうとみなしています。ただし、このあたりの現状認識は研究分野によって大きく異なります。

2. オープンサイエンスの推進とグリーンOA

「転換契約」はいわゆる「ゴールドOA」の一形態であり、知のインフラ整備という意味ではお金のかかるやり方です。したがって、サステナブルとは言えません。内閣府の総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）や文部科学省では、その先の「グリーンOA」をどのように国として整備するのかについても、オープンサイエンスの一貫として議論しています。今年5月12～14日にG7仙台科学技術大臣会

合が開催され、オープンサイエンスの推進について大臣コミュニケにしっかり書き込まれました⁴。さらに5月19～21日に広島で開催されたG7広島サミットにおいて発表された首脳コミュニケにおいても、科学技術に関するパートの冒頭部分で「オープン・サイエンス」が明記されています⁵。公式サイト⁶の仮訳を引用しておきましょう。

……G7は、FAIR原則（Findable（見つけられる）、Accessible（アクセスできる）、Interoperable（相互運用できる）、Reusable（再利用できる））に沿って、科学的知識並びに研究データ及び学術出版物を含む公的資金による研究成果の公平な普及による、オープン・サイエンスを推進する。これは、研究者や人々が恩恵を受けるとともに、グローバルな課題に対する知識、イノベーション及び解決策を創造することへの貢献を可能にする。……

グリーンOAとして、これまで大学図書館等は「機関リポジトリ」を立ち上げ、運営してきました。日本の機関リポジトリの数は他国に比してきわめて多いにも関わらず、その運用は決してうまくいっているとは言えません。ここで研究者の立場として一言申し上げるとすると、すでに苦勞して出版にこぎつけた論文をOA化するためだけに、共著者に了解を取って著者最終稿をアップロードする手続きを行うモチベーションは湧かないのです。研究者の意識はすでに次の研究対象に向かっていきます。また、例えば医学生命科学系であればPubMedと呼ばれる検索サイトに収集されなければ他の研究者に見てもらえないので、そのようなジャーナルに掲載されるのでなければ意味がないと考える方もいるでしょう。さらに、いわゆる「インパクトファクター（IF）」が付かない機関リポジトリでは「お墨付き」が無いと考える研究者もいます。

したがって、本気で我が国がグリーンOAを推進するのであれば、国レベルのプラットフォームの整備が必要と思われます。また、研究分野によっては、プレプリントサーバの活用についての議論が為されています。一方、英国のユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）では、新たに独自のUCL Pressというオープンアクセスジャーナルを運用し⁶、その結果として、文系の論文もどんどんOA化して、現在、同大学から発出される論文は90%以上がOAとなっていると伺いました。地元の公立大学法人宮城大学では、「宮城大学研究ジャーナル」というオンラインジャーナルをコロナ禍に立ち上げておられますが⁷、いかに注目されるジャーナルに育てるのか、大学の規模と人的リソースの点から悩ましいですね。いずれにせよ、とくに研究中心大学の附属図書館の機能としては、研究インフラとしての立ち位置が強く求められていると思われます。

3. コロナ禍からの回復と学習支援

さて、ようやく本年5月8日より新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、本

学キャンパス内のマスク着用は個人の判断に委ねられることとなりました。授業は対面を基本としつつ、DX活用によりハイブリッドで行われるものもあります。まだまだマスクは着用している学生さんが多いものの、キャンパスには明らかに活気が戻って来ました。附属図書館でも間引いていた座席をもとに戻し、やがて受付カウンターのアクリル板等も撤去する予定としています。新型コロナウイルス感染の脅威が去ったとしても、別の新興感染症がパンデミックになる可能性もあり、頻発している大型の地震への対応など、図書館として人が集まる物理的な空間をどう提供するのがベストなのか、引き続き多様な専門家の間で議論する必要があると思われます。

大学図書館は、これまで学生のための様々なサービスにも関わってきました。本学では「中級アカデミック・ライティング：現代的課題に関する文献購読とレポート作成」という情報探索やレポートの書き方に関する講義⁸が好評を博しています。今後、今年になって急に利用者が激増している ChatGPT に代表されるような生成言語をベースにした AI ツールをどのように活用するのかなど、臨機応変な支援が必要に思われます。

4. これからの図書館に期待したいこと

もし生成言語 AI がさらに賢くなれば、学生たちは図書館のレファレンス係に尋ねなくても、自分の読みたい本や探している情報にたどり着けるようになることは必至でしょう。費用やスペースの問題からも、情報のアップデートの速さからも、電子書籍の利用は増えることはあっても減ることは無いでしょうし、その分、大学図書館では紙媒体の書籍は減っていくと思われます。大学図書館職員の仕事の内容も、時代に合わせて変化していくことが必要ではないでしょうか。その意味で、研究大学の附属図書館であれば、教育支援だけでなく、研究のためのインフラの構築の重要な一翼を担うという点が、より重要になってくると考えられます。ちなみに、研究インフラには、環境整備として図書館エリアのカフェも含めたいところですね



References:

- 1) Wiley. "Wiley expands open access agreement in Japan". 2023-1-9,
<https://newsroom.wiley.com/press-releases/press-release-details/2023/-Wiley-expands-open-access-agreement-in-Japan--/default.aspx>, (参照：2023-05-31)
- 2) SpringerNature. "【共同プレスリリース】研究大学コンソーシアム (RUC) のメンバーを中心とする国内 10 大学がシュプリンガーネイチャーとオープンアクセス論文出版の促進に関する合意書に署名". 2022-11-21,
<https://www.springernature.com/jp/20221121-pr-1st-japan-ta-jp/23725324>,

(参照：2023-05-31)

- 3) 大隅典子. Wiley 社との「転換契約」締結：学術情報のコストは誰が払うのか？ (科学通信). 科学. 2022, 92 (6), 507-510
<http://hdl.handle.net/10097/00135322>, (参照：2023-05-31)
- 4) G7 Science and Technology Ministers' Communique. 2023-5,
https://www8.cao.go.jp/cstp/kokusaiteki/g7_2023/230513_g7_communique.pdf,
(参照：2023-05-31)
- 5) G7 広島首脳コミュニケ
<https://www.g7hiroshima.go.jp/documents/>, (参照：2023-05-31)
- 6) UCL press
<https://www.uclpress.co.uk/>, (参照：2023-05-31)
- 7) 宮城大学研究ジャーナル
<http://library.myu.ac.jp/research-journal>, (参照：2023-05-31)
- 8) 東北大学附属図書館. “中級アカデミック・ライティングー現代的課題に関する文献講読とレポート作成ー”
<https://www.library.tohoku.ac.jp/support/report.html>, (参照：2023-05-31)